

みどり会ニュース



題字/大槻たか 絵/亀本信子

第137号

日本女子大学社会福祉学科 卒業生の会みどり会 会報

2018年7月25日発行

このひと

清野真紀さん(新46)
社会福祉学科1996年(平成8年)卒

—与えられた立場で
自分の果たすべきことを
果たせばいいのかな、と
釜石で考えました。



「マスコミで働く!」という学生時代の熱い思いを実現し、現在フジテレビで担当部長をなさっている清野真紀さんをご紹介します。

夢をかなえて

入社後一年の研修期間を経て、テレビらしさのすべてが凝縮されていると思ったワイドショーに志望し配属されました。事件などが起きるとすぐに現場に向かい取材し、戻ってきたら翌朝の番組に間に合わせるために徹夜で編集して放送するという生活を四年間続けました。

—その後、番組広報に五年、経営管理に三年在籍後、映画事業局に移られました。

—ここでは、映画の放映権を配給会社から購入し、フジテレビで作った映画を有料チャンネルに販売する仕事を担当しましたが、最後の一年は映画作りのセクションにいました。

映画制作へ

君塚良一監督のドキュメンタリー

「遺体〜明日への十日間〜」と三谷幸喜監督のエンターテイメント「清須会議」という両極端の作品の現場に携わりました。

特に「遺体」は、東日本大震災直後に釜石の遺体安置所で実際に起こった出来事を石井光太さんがルポされた本「遺体」をぜひ映画化したという君塚監督の熱意と、未だ震災から二年しか経っていない時に公開するのはどうかと社内で議論された中、テレビ局だからこそ出来る映画ではないかと英断した当時の局長によって実現しました。原作を基にほぼ実話という作品です。

被災地への思い

私は両親が宮城県出身で親戚・知人が大勢いたので、何かしたいという気持ちは大きかったのですが、仕事とはいえ被災者の傷口を開けるようなことになるかもしれないと、すごく葛藤していました。そんな時、たまたま母に悩んでいることを絞り出すように話しました。「東北はもう大丈夫なんですよ」と言われ、悔

しい思いをすることがある。私はあなたがそういう映画に携わっていることを誇りに思う。」と、普段は優しい母からのきっぱりとした言葉に迷いが晴れ、PRから上映までのプロデュースを担当しました。

マスコミの使命とは

まずは釜石に行き、自転車で実際の遺体安置所があった場所や関係したところを見て回り、この作品のモデルになった方々にご理解の確認と、描かれていることに間違いはないかの確認に伺いました。母の言葉に後押しをされたとはいえ、皆さんの辛い思いに土足で踏み込むようなことをしてすみませんと小さくなって会いに行きました。

ところが、お会いした方々は「フジテレビさんが撮ってくださいるんですよ。」「踊る大捜査線の方が監督なんて光栄です。」とむしろ受け入れてくださっているような印象もあり、「えっ」という感じがしました。この時、マスコミがやるべきことってこういう事なのかもしれないと思いました。

マスコミは大量の情報を広く一般社会に伝達するコミュニケーションであり、それをやるべき立場の人間として、やる以上は覚悟を持っていかなくてははいけないと。

初めての試写会は釜石でしたが、上映する映画館もなくて高校の視聴覚室で行いました。辛そうにしていく方もおられました。ほとんどの

略歴

- | | |
|---------|------------------|
| 1996年4月 | フジテレビ入社 |
| 1997年6月 | 編成局社会情報部配属 |
| 2001年7月 | 広報局広報部配属 |
| 2006年7月 | 経理局経営管理室配属 |
| 2009年7月 | 映画事業局映画調整部配属 |
| 2012年7月 | 映画事業局映画制作部配属 |
| 2013年7月 | 広報局広報部配属 |
| 2017年7月 | 編成局広報センター広報宣伝室配属 |

方が最後まで観てくださいました。この映画は、利益を上げるのが目的ではなく、多くの方に観ていただき、後世に伝えていくことを目的として作られたもので、そこに関わることができたことは貴重な体験でした。

でも、ぼんやりとですが、このようなことをするために私は結果、福祉を勉強する機会に恵まれたり、この仕事を選ぶことになったりしたのかもしれないという運命のようなものを感じています。

—「社会福祉はどんな立場の人も普通に暮らせる社会を作るにはどうしたら良いかを考えることだよ。」というお祖父様の言葉が、清野さんの原点になっているのかもしれない。

現在は広報宣伝室に戻られ、番組宣伝デスクを経て、五月からは『デジタル広報』のチーフを担当なさっています。新たなジャンルへの挑戦。がんばってください!